

学位申請論文

審査報告書

2020年2月27日

関西福祉科学大学 大学院  
社会福祉学研究科長 様

学位申請論文審査委員会

主査 教授 安井 理夫



副査 教授 畠中 宗



副査 教授 津田 耕一



下記のとおり、学位申請論文の審査結果を報告いたします。

記

学位申請論文提出者 片山 徹

学位申請論文題目 レジデンシャル領域（高齢者）におけるソーシャル  
ワーク実践の研究  
～介護老人保健施設支援相談員の実践を通して

学位授与申請受理年月日 2019年12月20日

## I 学位申請論文の内容要旨

本論文の目的は、高齢者施設におけるレジデンシャル・ソーシャルワークを、実践をとおして培われた相談員の具体的な実践視座やスキルを明らかにすることによって、ソーシャルワークとして再構成することである。

その前提として、つぎの3つの問題意識が示されている。① レジデンシャル・ソーシャルワークという概念では高齢者施設のソーシャルワーク実践を十分には説明できない、② 現場の相談員の業務分析をただけではソーシャルワークとしての実践を説明できない、③ 高齢者施設の相談員は漠然とした実践理論しかもたないために、自らの実践を言語化できず、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティも主張できない状況に置かれている。これら3つの課題意識のもと、本論文は6章から構成されている。

序章では、生活型福祉施設の相談員は何でも屋的な役割を担わざるを得ない現状や、レジデンシャル・ソーシャルワークという概念の混乱を指摘したうえで、研究の目的、意義、方法について述べている。

第1章では、レジデンシャル・ソーシャルワークに関する文献レビューを行い、ケアワークやレジデンシャル・ケアとも比較しながら、ソーシャルワークとしての基盤すなわち人と環境の関係に着目し、利用者と協働で支援を展開し、集団、地域、施設、あるいは制度や政策の再構成も視野に入れたミクロからマクロにわたる生活支援過程の重要性を述べている。

第2章では、介護老人支援施設の相談員に対して、ソーシャルワークの専門的機能にもとづく実践内容を49 取りあげ、それらが支援相談員の専門的特徴を表していると思うか、それらを実際に行っているか、の2つについて行った調査について述べ、認識はあっても実践には至らない場合が多かったことを述べている。その後のインタビュー調査では、相談員の第一義的な思考は利用者主体にあること、それをふまえて利用者を取り巻く環境にも働きかけ調整することで専門性が確立されていくこと、他職種との協働的な取り組みをファシリテートする等の施設への働きかけの重要性について明らかになったと述べている。また、自分たちの仕事をソーシャルワークとして言語化していくためには、専門職同士のフィードバックやスーパービジョンが必要であることを指摘している。

第3章は、アセスメントと支援内容に着目した実践事例調査である。支援内容を、①クライアントへの直接的働きかけ、②社会資源との関係構築・調整、③施設運営・施設婦負連携の促進、④地域への働きかけの4つのカテゴリーから分析し、④に該当するものはなかったと述べている。そして、浮かびあがってきた支援内容と支援方法の特徴として、寄り添い、クライアントとの協働アセスメント、クライアントと環境の相互作用への介入、施設変容の機会作りという4つのキーワードを抽出している。

第4章では、これまでの議論をふまえて、レジデンシャル領域（高齢者）のソーシャルワークの基本的な視点として、クライアントの社会的自律性と実存性に根ざした支援活動を展開していくこと、施設システムを包括的・総合的にとらえる視点の2つを指摘している。そして、直接的支援活動の枠組みとしては、個別化、受容、自己決定などの中範囲の原則を基準とすること、実存的アセスメントを行うこと、クライアントの力を評価すること、間接的支援の枠組みとしては、「認知」、「状況」、「関係性」というキーワードで施設システムの評価や変容を行っていくことが重要だと述べている。

終章では、本研究の意義は、支援相談員へのインタビュー調査、実践事例調査という帰納的な研究方法によってレジデンシャル・ソーシャルワークの概念をソーシャルワークの考え方を基盤に整理し再構築したこと、その作業をとおしてクライアントを主体とした実存性と人と環境の相互作用に着目した支援方法の枠組みが提示できたことをあげている。

## II 学位申請論文審査結果の要旨

1. 問題設定：レジデンシャル・ソーシャルワークとして説明されていた理論が、実際のソーシャルワーカーの支援を説明できるものにはなっていないという問題意識や、現場の実践から帰納的にソーシャルワークの実践理論をまとめることがソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの確立や自己肯定感につながるという研究の意義は、臨床福祉学との関連において適切である。



2. 先行研究：レジデンシャル・ソーシャルワーク、高齢者施設での支援、ソーシャルワーク理論など関連領域の先行研究が適切にレビューされている。
3. 論文構成：問題の所在から結論に至るまでの内容がフローチャートで示された構成どおり論理的に記述されている。
4. 研究方法：高齢者施設における支援をソーシャルワークとして再構成するという研究目的に対して、現場のソーシャルワーカーへのインタビュー調査、実践事例調査を通して帰納的にまとめていくという研究方法是適切である。
5. 研究倫理：研究倫理が遵守されている。調査研究については本学において承認番号 13-10、14-24、17-28 として承認を受けている。
6. 社会貢献：本論文は、片山氏が介護老人支援施設でソーシャルワーカーとして勤務していたときの問題意識が執筆の出発点となっている。したがって、研究は利用者や支援者に対するサービスの質の向上をめざした現実的で有用な内容に終始した論文と評価する。
7. 学術貢献：本論文に関連して、論文執筆（査読付）が 4 編ある。このことは本研究が一定の社会的評価を得ている証左である。レジデンシャル・ソーシャルワークの概念をソーシャルワークとして再構築した業績は学術的に意義があり、臨床福祉学の発展に寄与する内容であると考えられる。
8. さいごに、片山氏も記述していることであるが、本研究は、調査研究が介護老人支援施設の支援相談員に限られていたこと、実践のための具体的な支援技術のレパートリーについては十分に検討できなかったことなどについて課題を残している。今後に期待したい。

### Ⅲ 最終試験結果の要旨

上記の学位申請論文審査結果のとおり、審査委員会は全員一致で本学位申請論文を博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定しました。

### Ⅳ 公聴会の日時

2020年2月27日

### Ⅴ 審査委員会の所見

本学位申請論文審査委員会は、本論文が、レジデンシャル領域のソーシャルワーク実践に関して新たな知見を提示した内容であり、博士学位に相応しいものと判断します。

以上